

# 死に人生の意味を見出す

— シャーウッド・アンダソンの「森の中での死」を読む(前編)

## Finding the Meaning of Life in Death: Sherwood Anderson's "Death in the Woods" (Part 1)

儀 部 直 樹

GIBU Naoki

### 現し身、空蟬

「現し身(うつしみ)」という日本語がある。これは「現在生きている身」という意味である。「空蟬(うつせみ)」もある。この言葉には「この世に現に生きている人」も「この世」も含まれる。ちなみに和英辞書で「空蟬」を調べると、[この世の人] this present body、this present existence、this mortal frame、加えて、[現世] this world、this life、temporal things、等の英訳例を見ることができる。畢竟、われわれはみな空蟬ということになる。現し身であるこの肉体は死んだ後、われわれ人間は一体どうになってしまうのか。いずれは訪れる自分の死に対してわれわれは、どう向き合えばよいのか。

「唯物論」という哲学がある。これは万物の根源を物質と考え、精神の实在を否定する思想である。唯物論者は、われわれが心とか魂と呼んでいるのは脳の働きである思考にすぎず、この世や人生に起きることはすべて偶然であり、それらには互いに深いつながりなどはない、とみなす。したがって唯物論者は、われわれ人間の意識はその肉体の死とともに、この宇宙から跡形もなく消滅してしまう、と考える。このように唯物論者のいうように、スピリチュアルな世界の存在やその仕組みはわれわれの脳の錯覚によるものなのか。さらに言えば、自分に起きることは一つ残らず偶然の出来事であり、良いことにも悪いことにも、何の意味や理由もなく、相互に何の関係性もなく、ただ幸運だった不運だった、という事実にすぎないのか。果たして、唯物論は真理なのだろうか。

それとも、ある種の専門分野の書物で述べられているように、次のような考えはどうだろうか。われわれの今生における出来事には偶然というものは何一つない。そのすべては、よほどの理由があって起ったものである。その出来事や経験は、一つひとつが、訳があって互いに結ばれており、そこには大切に重要な意味や学びが「人生の問題集」として用意されており、その問題集の答えは、われわれがこの世での人生を終えたあとに、われわれの魂の成長のために明かされる。もっと言うと、すべての人間には死後生というものが必ず待ち受けており、どの魂も「中間生」とも言われる死後生において再生の時間を、「ソウルメイト」と呼ばれる他の魂たちと愛を学ぶために一緒に過ごしたのち、その学びを生かし、より成長するために、再び肉体をまとして、物事が思い通りに行かない不自由なこの世に何度も生まれ変わる。それにこの「死後生の存在」や「生まれ変わりを繰り返す」という概念は、「宗教的思想・信念」、「その人の願望」、「霊媒による物語」、等で終わ

るものではない。仮説ではあるものの、科学的な根拠によってすでにある一定は解明されているし、今後も、科学者らによるそれらの研究は継続されていく。

以上のように、死後生仮説や輪廻転生の仮説を事実として受け入れることで、われわれの今生の生き方も変わる可能性があるのではないか。このようなスピリチュアルな観点で物事や人生や宇宙を捉えることは、悪いことなのか。むしろこのスピリチュアルな「もの見方」は、人間の営みや思考にも、良い意味で応用できるのではないだろうか。

## スピリチュアリティ

生と死は切り離されたものという考え方と、その二つは連続したものという考え方、があるとす。前者は唯物論的の死生観で、後者は「死ぬということは体を離れて生きること」というスピリチュアリティ教育の死生観・思考方法といえる。では、前者と後者どちらの死生観の方が、「一度きりの人生だから一生懸命に生きよう」とか「今を大切に生きよう」というわれわれがよく耳にする人生観を維持させるためのモチベーションとなりうるだろうか。

『生きがいの創造』を始めとする数多くの「生きがい論」シリーズの著者である経営心理学者の飯田史彦氏は、1990年代から、スピリチュアリティ教育の「死生観」を通して、生きるモチベーションという問題に取り組んできている研究者である。その飯田氏は1996年発表の『生きがいの創造』の「はじめに」において、こう述べている。

本書は、「死後の生命」や「生まれ変わり」のしくみに関する科学的研究の成果を、わかりやすく整理してご紹介し、それらの研究から得られる知識を活用することによって、私たちの人生観がどのような影響を受け、日々の生活がいかに素晴らしいものへと変わるだろうかということについて考える、新しい観点からの「生きがい論」です。

したがって、本書の目的は、「死後の生命」や「生まれ変わり」の存在そのものを証明することではありません。これらについて、だれをも100%認めさせることができるように証明することは、この世に「否定したがっている人々」がいるかぎり、どのような方法を用いても、不可能だと思うからです。

たとえば、かりに本物の魂が幽霊としてあらわれ、世界中の人々の前でテレビに出演して記者会見を開いてくれたとしても、目の前の現実を信じたくなければ、いくらでも無理な理屈をつけて否定することができます。全員が幻覚を見ているのだ、脳のいたずらによる錯覚だ、テレビ局のトリックだ、物理学の法則には当てはまらない、などと主張していけば、最後まで何が何でも否定し続けることは可能ですし、そう思ったがるのも、まったくのその人の自由であり権利なのです。<sup>(1)</sup>

日本人の死生観には、個々の信仰心に基づいたものも当然ある。宗教や信仰の目的は、「死後の生命」の存在を証明することで人々の心を救うことである。けれども、一般的には人々の死生観は曖昧なものであると思われる。極端な「唯物論」も、偏向した「スピリチュアリズム」も割合としては少ない。個々人を見れば、いくぶんは唯物論的な傾向のある人、スピリチュアリズムの神秘性にある程度魅かれている人、「唯物論」と「スピリチュアリズム」いずれの要素もぼんやりと持っている人、等それぞれの違いはあるのだろうが、

総じて言えば緩やかであると思われる。したがって飯田氏の薦めるスピリチュアリティの科学的研究を断固拒否する人はそう多くはないだろう。しかし、大半の人は強い抵抗感を示さないものの、何か怖さや不確かさも感じるのではないか。

飯田氏の「生きがい論」は科学的なスピリチュアリティ論である。その究極の目的は、読者が今生をさらに生きたくなるような「死生観」「人生観」を提供することである。「生きがい論」はその名の通り、実際の人生にも生かされるし、さらに進んで本論のような文学探究にも生かされるはずである。そのことを踏まて、先の飯田氏の文章の続きを引用する。

そのため、「死後の生命」や「生まれ変わり」が本当にあるのかどうかという「真理」については、私自身も、「いずれは死ねばわかることでしょう」とお答えすることしかできません。しかし、それらの真理がどのようなものであれ、本書でご紹介するようなさまざまな現象の研究結果が、多くの人々を大いに元気づけるという現実には、「生きがい論」の研究者である私は価値を感じているのです。

このように、私は「真理」には関心がなく、生きがい感の向上という「現象」にこそ、関心を抱いています。それは、私が心理学者や哲学者、物理学者ではなく、「会社や社員を元気にする方法」を研究する実践派の経営学者であり、「人々の心を治す」という意味では、むしろ医者に近い立場にあるためです。だからこそ本書は、意外なテーマである「死後の生命」や「生まれ変わり」を材料にしているものの、あくまでも「生きがい論」を目的としているというわけです。<sup>(2)</sup>

宗教家ではない飯田氏は、「生きがい論」を論じるうえで読者に誤解を与えないように意識し、徹頭徹尾研究者としての立場を貫き、常に客観性を保ち言葉を慎重に選び限定を重ねていく。

ただし、「認める」と、「信じる」とでは、その意味がことなります。「信じる」というのは、たとえ何の根拠がなくても、自分が「こう考えることにしよう」と決心するだけで実行することができ、これまでは「宗教」の領域であつかわれてきました。一方で、何かを「認める」ためには、自分でそれを納得することができるだけの根拠が必要であり、だからこそ「科学」の領域にふみこんで検討する必要があるといえます。

このような意味から、本書ではまず、「死後の生命」や「生まれ変わり」のしくみに関する科学的な研究結果を、わかりやすく整理してご紹介します。これらの研究結果を目にし、それが単なる「信じたい」という水準を超えて、「認めよう」という水準にまで達しているとみなすかどうかは、読者であるみなさんのご自由です。「まだまだ不十分だ」と否定する方もいらっしゃるでしょうし、逆に、「これだけ証拠がそろっていれば、自分にとっては十分すぎる」と驚く方もいらっしゃるでしょう。

この時、私がみなさんに問いかけたいのは、本書でご紹介する研究成果をもとに、「死後の生命や生まれ変わりを認めるとすれば、私たちの生き方がどのように変わっていくだろうか」ということです。決して、「認めなさい」と無理強いするつもりはありません。本書の目的は、否定したがる方々を説得することではなく、あくまでも、これらを認め

ることに迷いを感じていらっしゃる方々を勇気づけたり、すでにこれらを「信じて」いらっしゃる方々に科学的情報を提供することによって、みなさんの人生を、大いに応援することなのです。<sup>(3)</sup>

私はこの飯田氏の研究目的を、本論で展開していく「文学作品の登場人物の死にその人生の意味を見出す」というテーマに活用していきたい。そうすることで、物語を読んで今まで見えなかったことや気がつかなかったことが、浮かび上がってくるかもしれないからだ。飯田氏の「生きがい論」シリーズは、1996年発行の『生きがいの創造』を始め、主に2000年の『生きがいの催眠療法』、2004年の『[新版] 生きがいの本質』、2009年の『スピリチュアリティ教育のすすめ』、2012年の『[完全版] 生きがいの創造』、そのほか単著・共著を合わせると多数あり、論拠として示しているのは、飯田氏自身が行った数多くのカウンセリングや専門家と共同で行った臨床研究等を通して蓄積した膨大なデータ、それらを補強するのが国内外の権威ある医師や臨床心理学者が著した浩瀚な参考文献である。このことは、飯田氏の研究がしっかりと科学的証拠によって裏付けられていることを示すといえよう。

### 文学の中の孤独な死

文学作品の読み方には様々なアプローチがある。その中でも、登場人物の死が描かれている作品の読み方は難しいように思われる。その死を「観念的」「象徴的」な視点で捉えることもできる。しかし、論じる側の死生観が曖昧なままでは作中人物の死の中にその人生の意味を見出すことはできない。そこで私は、科学的な情報を活用したスピリチュアリティ教育の観点で、物語の登場人物の死に光を当て、その人生の意味を探り、できることなら、その中にささやかながらも救いを見出せれば、と思っている。ここで私の言う「救い」とは、読者がその人物の「死」を見届けたあとに、「この人が生まれてきてくれて良かった」と思えることである。具体的に論じるのは、アメリカの作家シャーウッド・アンダソン (1876-1941) の或る作品である。

生きている間何一つ良いことがなく、孤独死する人がいる。小説にもそういう登場人物がいる。アンダソンが1933年に発表した短編小説「森の中の死」は、まだ四十歳なのにその過酷な生涯ゆえにヨボヨボの老婆にしか見えない貧しい白人女性が雪の降る森の中で行き倒れるという、哀れで不幸な孤独死を描いた話である。夫にも息子にも冷たくされ誰にも愛されることのなかった女性の「死」を、アンダソンはどんな思いで、書いたのであろうか。

アメリカ文学者宮本陽吉氏は、「森の中の死」も含めたアンダソン文学の特徴を次のように述べている。

場面で始まり、その緊張を場面の切り替えによって最後まで保ちつづける現代小説と比較するならば、主人公の紹介に始まり、人名や地名によって喚起される連想にふけり、大きな思い入れを見せながら、話の核心に徐々に近づいて行く方法は、きわめて一九世紀的なものである。この場合、開拓地の語り手の中から生まれ、その方法を文学の中に定着させたマーク・トウェイン (Mark Twain) の存在が浮かびあがる。『ハックルベ

リー・フィンの冒険』は、鍍金時代の混乱した文明から逃避するために一九世紀前半の少年期に目を向け、エピソードをつなぎあわせたルースな構成を持つ作品であるが、その特徴はそのまま『オハイオ州ワインズバーグ』にあてはめることが出来る。

またフロイトをとりいれる場合にも、フロイトを読んで、理論をそのまま下敷きに作品を書くことはなかった。フロイトに接することによって自身の語法をゆたかにし、題材に深味を持たせている。

アンダソンが新しい文学の機運の中に身を置きながらも、つねにアメリカを愛し、新しさを大胆に吸収しアメリカ的なものに同化していったことには、とくに注意しなければならない。<sup>(4)</sup>

この宮本氏の分析は、「森の中での死」を読むうえで、大きな助けとなるといえよう。なぜなら私はアンダソンの作品において、不自然なヒーローに出会った記憶もドラマチックな場面展開を目にした記憶もないからである。語り手の心に或る人物がぼんやりと浮かび上がり、そして、その人物を必死に手繰り寄せて読者の前に届けようとする。それがアンダソン文学の世界である。

#### 語り手はなぜ老婆の死に思いを巡らせるのか

「森の中での死」の発表は1933年である。これは、語り手が小学生の頃に起こった出来事の話である。物語の時代設定は、自動車が出てこないことや、登場人物の一人である年配の警察署長が若い頃に南北戦争（1861-65）で片脚を負傷した大柄な男であったという記述などから、1890年頃、つまり語りの時点を保てずに作品発表時と同一と見なした場合、そこから四十年以上も昔のことであろうと推測できる。語り手が少年時代に見たという老婆の遺体の様子、老婆にまつまる伝聞、これらは記憶の中の「事実」であるが、その記憶の中の事実に、当時誰にも目撃されることのなかった老婆の死に至るまでの過程を、語り手が創作して加えていく、というのがこの物語の構造である。語り手の頭によぎる断片的な記憶のつぎはぎに想像が組み合わさった形式の物語なので、話の時間の流れが真っすぐではない。とりわけ物語の前半において語られる老婆の生い立ちや境遇については、話が前後する「意識の流れ（stream of consciousness）」の要素もある作品である。

ではこの作品の冒頭部分を引用する。

彼女は年をとった女で、わたしの住んでいた町の近くの農場で暮らしていた。田舎や小さな町の者たちならみんなそういう老婆に出会ったことはあるだろうが、彼女たちの境遇についてはろくに知っている者はいない。そういう老婆は老いぼれ馬をつけた馬車で町へやってくるか、バスケットを下げて歩いてくる。雌鶏を数羽飼っていて、売るつもりのお卵をいくらか持っている場合もあるだろう。バスケットに入れて食料品店に持ってゆく。食料品店で物々交換をするわけだ。塩漬けの豚肉や、豆をいくらか手に入れる。ついで砂糖を一ポンドか二ポンドと、小麦粉をいくらか買う。<sup>(5)</sup>

この文章からわれわれ読者は、「主人公の紹介に始まり、人名や地名によって喚起される連想にふけり、大きな思い入れを見せながら、話の核心に徐々に近づいて行く」という

宮本氏の先の分析が、いかに正鵠を射ているかということがわかる。

この老婆が、実は年齢的には老婆ではないのだが、雪の中で死んでしまい、翌日か翌々日に発見された昔の出来事を、語り手は思い出して語るのである。作者アンダソンはなにゆえに語り手に、一人の女性の孤独死を回想させたのであろうか。作品を読み解くうえで重要な鍵となりそうなのが、アンダソンの死生観であると思われる。アンダソンは、語り手に自分の死生観については直接言わせることはない。しかし、人が死生観に関心がなければ、わざわざ老婆が死にゆく情景を想像で克明に描出し、その心中も推し量る、というようなことはしないであろう。このような死への視線と対照的なものが自然主義文学の死の捉え方である。

19世紀の後半から20世紀の始めに、一時的ではあるが、アメリカでは自然主義文学が隆盛を極めた。自然主義とは、人間の運命を決定づけるのは生物学的遺伝と社会的環境であり、これが盲目的な新しい神であり、人間の運命は完全に偶然によって決定づけられるという思想である。唯物論を想起させる思想の自然主義に基づいて書かれた文学が自然主義文学である。盲目の運命の気まぐれで、不幸な運命を生きる人物が主人公の場合が多い。生まれつきの才能とその環境が運命の決定的な条件で、強い者が必ず勝つ、すべては偶然によって起きる、という法則の枠の中で作品は書かれている。自然主義文学作品は、「人生の意外性」、「出来事に用意された重要な教え」、「死の意味」などには全く重きを置かない。生まれ変わりの概念などはおろか、死後生仮説すら、自然主義文学作品は、認めない。

宮本氏はアンダソン文学をこうも評している。

アンダソンは、自然主義作家たちが、環境対個人という図式において人間を外側から書くことに専念していた時期に、社会を背景において、その中に自由に純粹に生きる人を描いた。自然主義作家たちが細部を入念に描いていた時期に、印象主義絵画を連想させる手法によって情景をつくりあげ、大胆に細部を省略する方法をとった。<sup>(6)</sup>

宮本氏が述べているように、アンダソンは純粹に生きる人を描いている。アンダソンの作品は細部を省略しつつ、リアリズムの力で迫り、それゆえに一層読者の想像力を喚起する。

語り手は、人間の死を考えることでその生への興味が湧き起こったのであろう。死ぬ直前まで、たとえどんなに短くても、その人間は生きていたのだ。死に向かって、その人間の五感はどうのように働き、心は何を思ったのだろうか。そこに至るまでのその背景や原因や動機は、いったい何なのか。何があったのか。このように誰かの死に意識を向け始めると、必然的にその人物のそれまでの生がくっついてくるのだ。

### 出来事を時系列で追う

老婆のようにやつれたその女性の苗字はグライムズ (Grimes) である。名前は明かされない。彼女の過去について読者が知りえる情報は、当時語り手が町の人から聞いた噂だけである。不確かな伝聞を頼りにした語りの中でわれわれ読者は、われわれ独自のその老婆像を作り上げていくのである。

先述したように、この作品は意識の流れに沿って語られているために、話が時間の流れ

通りでなく、行ったり来たりする。そこで、出来事を時系列で並べて整理する。女性は孤児であった。

わたしも今では思い出したが、たしかに彼女は年季奉公人だったのであり、父親や母親がどこにいるかも知らない境遇だったのだ。ことによると父親と呼べる者はいなかったのかもしれない。それがどういうことか諸君には想像がつかだろうが。そういう年季奉公の子供たちはたいてい冷酷な待遇をうけていた。彼らは両親のない子供たちだったし、事実上は奴隷も同然だった。その頃は孤児院などは数少なかった。そういう子供たちは法律的にもどこかの家に縛りつけられていた。その結果どうなるかはそれぞれの運しだいだった。(I remember now that she was a bound girl and did not know where her father and mother were. Maybe she did not have any father. You know what I mean. Such bound children were often enough cruelly treated. They were children who had no parents, slaves really. There were very few orphan homes then. They were legally bound into some home. It was a matter of pure luck how it came out.) (p.7)

この女性は1890年頃に四十歳で死んだ、と仮定すると、生まれたのは1850年頃である。その時代は南部では依然として黒人奴隷制度が存続しており、作品の舞台である中西部においては貧乏な白人にも人権らしきものは保障されていなかったであろう。

それから女性は十代の少女の頃に、小麦畑を所有するドイツ人農夫婦の年季奉公人となる。ほっそりした体つきのその少女の仕事は、ドイツ人夫婦の食事の世話と、家畜の餌の世話であった。ドイツ人は少女に下心を持っていた。少女はその男に怯えていた。その細君はお尻の大きい頑丈な女だった。夫と少女の関係を疑う細君は、少女につらくあたった。小麦の収穫期の六月に、ジェイク・グライムズ (Jake Grimes) という青年が、その農場に働きに来て、ドイツ人男との決闘の末、少女を奪い去った。その後少女はジェイクと結婚する。ジェイクは父親のわずかな遺産を浪費し、乱暴者でろくに働かず、酒を飲み、馬泥棒をするような堕落した人間であった。夫婦には息子が生まれ、その後娘が生まれるが、娘は幼くして死亡した。彼女の仕事は、痩せて乳も出ない牛、それから馬や豚や犬や、亭主と息子に何かを食べさせることであった。当時息子は二十一歳で、すでに刑務所で一度刑期を終えていた。息子も父親と同様、手に負えない人間である。息子は、だらしなない情婦といつも一緒にいて、母親を女中のように扱う。息子にそうされても彼女は、なんのショックも受けなくなっていた。亭主も息子も、馬泥棒をし、飲み歩き、それを繰り返す人間だった。家にお金を入れることはしない。それどころか、二人とも彼女の家畜を勝手に売り飛ばすような道德観のかけらもない連中である。無責任な亭主は家のことは一切妻に押し付けておきながら、家に帰ってきた時に食べ物がないと、ケガを負わせるほど彼女の頭を殴りつける。すると、自分の鶏を数羽持っていた彼女は、大急ぎでそのうちの一只を殺すしかない。全部を殺すはめになったら、町へ行ったら売れる卵も手に入られなくなるのを彼女は恐れていた。亭主と息子は時おり喧嘩をした。二人が喧嘩している時には、彼女はそれだけで震えていた。彼女は黙り込むのが習慣になっていた。

以上が、長くはなったが、作中に時間が前後しながら点在する老婆の生涯に関する情報を、時系列で並べた結果である。

ここからわれわれは、老婆が死に至るまでのその静かなダイナミズムを追うことになる。

### 老婆の行動を想像する

彼女が死に向かう当日の行動を知る手がかりは、彼女がその日買い物をした店や彼女の遺体の発見場所と遺体の様子だけである。それ以外の彼女の本当の行動や心理は語り手にも誰にもわからない。けれども語り手はその空白部分を想像力で埋めていくのだ。物語が進むにつれて、この語り手の想像力は霊性、神性を帯びていくように思える。

当日彼女は、なぜ出掛けなければならなかったのだろうか。語り手はこう描写する。

冬の或る日のこと、その老婆はわずかばかりの卵を持って町に出かけ、犬も彼女についていった。家を出た時にはもう三時近くになっていて、しきりに雪が降っていた。彼女はこの数日からだの調子が悪かったのだが、貧弱な服装のからだを猫背にして、何かぶつぶつ呟きながら歩いていった。卵は古びた穀物袋の底にくるみこんでいた。たくさん入れているわけではなかったが、冬には卵は値が上がる。彼女はそれらの卵と交換にすこしばかりの肉や、塩漬けの豚肉や、砂糖や、できたらコーヒーも少々、手に入れるつもりだった。もしかすると肉屋ではレバーをひときれくらいはもらえるかもしれない。 (pp.10-11)

彼女はその日買い物のために町まで出かけたのは、わずかながら卵が手元にあったからである。体調が良くないにもかかわらず、あまつさえ雪も降る中、あえて町に行ったのは、家畜のひもじそうな鳴き声を聞くのが、空腹の四匹の飼い犬の姿を見るのが、忍びなかったからである。彼女の体の具合が良くなかったということや、家畜や犬の飢えの苦しみをほっておけなかった、というこれらの事実を証明する証拠は何一つない。彼女の気持ちについては、すべて、語り手の想像が作り出したものである。語り手が老婆に注ぐこの心の視線には、愛がある。空蟬の老婆はどんな歩みで死に近づいていったのか。その道程を、老婆のうしろ姿を、やさしく包み込むような愛のある視線で語り手は静かに見守っていくのである。そしてわれわれ読者が、その老婆の死出の旅にその人生の意味を見出すには、スピリチュアリティ教育の視点が必要であると思われる。この視点が、暗闇の道を照らし導いてくれる愛と救いの光となるからだ。私は、次回「後編」の中で、語り手の視線にスピリチュアリティ教育という光の視点を重ねつつ、この老婆の最期を見つめていくつもりである。そうすることで、老婆の背中に光が当たり、老婆のこれまでの人生、生まれる前の魂、死後の魂を想像し、老婆の死に、ささやながら大切な意味を見出すことが可能かもしれないからだ。

(後編に続く)

注

- (1) 飯田史彦『生きがいの創造 “生まれ変わりの科学” が人生を変える』(PHP 文庫, 1999), pp. 32-33.
- (2) 前掲書, p. 33.
- (3) 前掲書, pp. 33-34.
- (4) 宮本陽吉「評価」。この「評価」は大橋吉之輔編『20世紀英米文学案内 8 アンダソン』(研究社出版, 1968) 所収の論文である。p. 193.
- (5) Sherwood Anderson, “Death in the Woods,” in *Death in the Woods and Other Stories* (New York, Liveright · ING · Publishers), p. 3  
大橋吉之輔編 *The Complete Works of Sherwood Anderson (XI) Alice and the Lost Novel Death in the Woods and Other Stories* (Kyoto, Risen Book Co, 1982) 所収の版のものを使用した。以下この作品の引用はこの版による。カッコ内の数字は頁数を示す。引用の日本語訳は、橋本福夫訳『アンダスン短編集』(新潮文庫, 1976) を借用した。
- (6) 宮本陽吉「評価」 p. 196

Received : April, 27, 2020

Accepted : June, 10, 2020

